建設通信新聞

発行所　日刊建設通信新聞社
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町3-13-7
電　話（03）3259-8711
FAX（03）3259-8730
振替貯金口座00190-2-97953
©日刊建設通信新聞社 2011

切れない堤防の幻

～ダム是非検証“考”～②

“態（わざ）と切り”の極意 今に

淀川浸水に減災の知恵

富士常葉大学名誉教授　竹林 征三氏

剣豪といわれる人には、極意の技がある。

佐々木小次郎の〝つばめ返し〟、宮本武蔵の〝二刀流〟等々である。

淀川の下流域には浸水被害軽減の治水技法として、「態と切り」という人為による堤防切開き工法が中世以降脈々と伝えられてきている。

態と切りの歴史は明治以前ならば正徳4（1714）年5月の八幡市の蜻蛉尻川に始まる。享保20（1735）年6月の都島区網島の淀川左岸（現大川）堤の切開き。延享元（1744）年、享和2（1802）年、文化4（1807）年における枚方市赤井堤の切開きが文献上に記録されている。

明治以降では淀川の3大氾濫である明治18（1885）年（淀川左岸枚方市三矢付近の堤が決壊し、北河内一帯が浸水した。網島の淀川左岸切開き）、大正6（1917）年（淀川右岸高槻市大塚決壊、淀川下流稗島～福村内9カ所　態と切）、昭和28（53）年（台風13号洪水、桧尾川と淀川の合流点付近切開）のいずれの洪水時も、浸水被害軽減のための重要な治水減災工法として態と切りを行っている。

態と切りの極意は、

1．堤外地の水位が堤内地の水位より下がった時にさっさと堤防を切る。

2．切る場所は堤内地の浸水区域の、内水および決壊により進入した外水が殆どはける位置を選定する。

3．堤内地の内水および決壊により進入した外水の排水が終われば、さっさと切り開いた堤防を盛り直して修復する

その1：次の洪水がいつやってくるかわからない。次の洪水時までに堤防の修復が終わってなければ、そこから洪水が入り、人災となる。

その2：干潮区間であった場合、次の満潮や高潮で海水が逆流して堤内地に入ってくる。

淀川の高槻から下流右岸のいずれかの堤防が切れれば、氾濫流は、破堤した所から右岸の市町村を順次襲いながら、淀川右岸の最下流の大阪市内（淀川区、東淀川区、西淀川区）で溜まる。浸水深は高くなる。

排水機場の能力は、上流からの破堤による氾濫流まで想定していないので、排水するのに何カ月もかかることになる。

態と切により浸水被害の期間は大幅に縮小される。

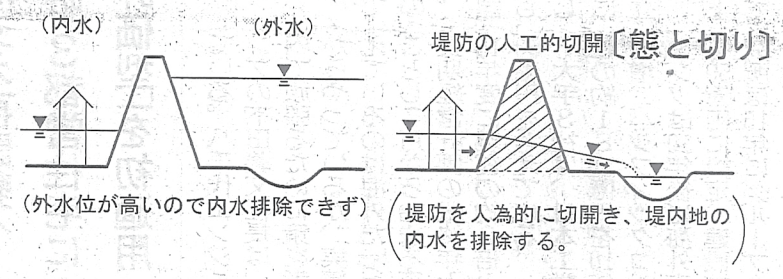
淀川の枚方から下流左岸のいずれかの堤防が切れれば、右岸と同様、氾濫流は左岸の最下流の大阪市内の中心部で何日も溜まることになる。

態と切は淀川下流域の地形特性と淀川の洪水特性を考えた場合、浸水被害軽減工法として極めて有効で合理的な工法である。

淀川下流部の破堤は最近50年余、生起していないが治水の安全度が上がったからというよりは、たまたまそのような大豪雨が生じなかっただけである。災害の宿命の地形条件などの構造は一切変わっていない。最近の異常気象によって洪水災害の危険度はかえって増している。

このような緊急避難的な水害軽減工法を使わないためには、上流ダム群における洪水調節、流域内での総合治水対策の推進、堤防の強化・維持管理の充実、水防活動の強化など地道な努力を積み重ねる以外に道はないのである。しかし、それを超える洪水が生じた場合、態と切の減災工法を熟知した対応を考えておく必要がある。

また、現在、大河川ではリアルタイムのハザードマップの整備が水防法で位置付けられているが、地球温暖化などによる気象の先鋭化を考えると、過去の知恵と現在の技術を融合させ、万一の際の、被害最小化のための氾濫流の制御はいかにあるべきか、改めて検討しておくことが必要ではないだろうか。



浸水被害軽減工法としての〝態と切り〟